



帰敬式(おかみそり)を受けましょう

赤羽別院報 第12号
 発行所: 真宗大谷派 赤羽別院 親宣寺
 発行人: 野々山 洪美
 愛知県幡豆郡一色町 赤羽上郷中14
 Tel.Fax.(0563)72-2308
 印刷: (株)エムアイシーグループ

赤羽別院帰敬式の案内
 4月11日(火)
 報徳会・帰敬式受式
 記念法話
 渡邊晃純師『念仏者の生活』

執行の辞 (ことば)

帰敬式は、仏・法・僧の三宝に帰依し、仏弟子として新たに出発をする式です。仏弟子となることは、自らの人生を挙げて仏法を聴聞し、讃嘆して、全ての人とともに、人としてまことの道を歩むことです。今後は宗祖親鸞聖人が明らかにされた本願念仏の教えを依りどころとして、いよいよ御同朋・御同行の交わりを深め、寺を聞法の道場として相續くださいますようお願い致します。
 (『帰敬式の手引き』より)



赤色赤尖

物には名前を付けて呼ぶ。赤ちやんは名前を届けて戸籍を作り、個人を特定する▼文学的表現に「名もない花」とか「名もなき雑草」と使われがちだが、その人が知らないだけ、動植物にはすべて学名が付く▼学名にはラテン語を使う。現生人類「ヒト」の学名はホモ・サピエンスである▼名前のない草が見つかれば、新種の大発見の可能性もある▼キリスト教徒は洗礼を受けてクリスチャンネームを授かり、日曜日には教会へ礼拝に行く▼仏教徒は仏弟子となった証に法名・法号・戒名などを授かってお浄土に還る。真宗門徒は戒律による修行はしないから、戒名でなく法名という▼法名は命終のとき初めて授かるものと誤解している人が多い。生前に帰敬式(おかみそり)を受けて授かり、仏弟子として朝夕お内仏にお参りする生活をしたものである▼日に五回一斉に礼拝している人たちが、教義の違いで相争っている場合もある。敵対関係を築いていてはホモ・サピエンス(知性人)の名が廃る。蓮如上人はお文に「諸法を誹謗すべからず」と仰せられている。
 (永谷 在)

赤羽別院 真宗講座

偈信正

 職住綱守
 師 純晃邊渡


今、日本でも問題になっているターミナル・ケア。つまり、癌の末期患者、そういう方々を看取ってこられたアメリカのキユーブラ・ロスという先生がお

られます。一九八五年でしたか、日本へ来られました。

末期癌の患者の方々の看取りをしてこられて、その手記をまとめられた『死ぬ瞬間』（中公文庫）という本があるのですけれども。

そのキユーブラ・ロス先生が、たくさんの臨床例を報告しておられるのですけれども。ある患者さんを担当せられた時に、その患者さんが、

「私はいいい生活はしてき
たけれども、本当に生き
たことがありません」

そういう言葉を残して亡くなっ
ていかれたそうです。

で、僕たちにですね、ロス先生はこの患者さんのことを、私たちに関係のない人達だと言え
るだろうかと、問いかけておら
れます。僕たちの生活は、いい
生活”を目標として、一生懸命
命やっているわけですね。

そのロス先生がですね、いい
生活はしてきたけれども、本当

に生きたことがありません、と言った患者さんを看取って、こ
ういうふう言っておられます。
「その人たちは、あきらめとさ
びしさと苦しい思いの中で、死
んでいきます」と。

今その、法蔵菩薩がですね、

「国を棄て、王を捐て」
て、仏道を求められた

ということを、現代の問題とし
て受け止めると、いい生活はし
てきたけれども、本当に生きた
ことがありません、ということ
ですね。

これはまあ、釈尊の出家とい
うことにも、そういうことが言
えます。釈尊もシャカ族の王子
です。そして、二十九歳の時に
出家されるわけです。四門出遊
というようなことは、皆さん知
っておられると思います。老・
病・死という問題ですね。北の
門から出られた時に、非常に心
安らかな出家者に出遇うとい
うことがあって、道を求められ
るんです。

やっぱり、皆、いい生活”
ということを目指すんだけれど
も、それが本当に人生の目標に
なるかというところ、それは必ず壊
れる。そういうものを頼りにし
ていくという中で、「本当に生
きる」とはどういうことか。こ
れはまあ、ずっと仏教に一貫し
ている課題なんですね。あんま
り難しいことは、仏教は言っ
ないと思いますよ。

私どもは、生きるということ
の中で、根本の願いというか、
本来の願いに出遇いたいという
要求をもっている。その要求に
目覚めるまで、人生に安んずる
ことができない。それが経に、
法蔵菩薩というかたちで説かれ
ているんですね。

《第五回（一・一八）より趣旨抜粋》

《今後の日程》

4月 5日(水)

5月10日(水)

6月14日(水)

7月 5日(水)

 ○午後1時30分
 ～3時30分

第九組のページ

人間が人間であつたために

今は一大宗教ブームだそうである。ひと頃、片隅に追いやられていた宗教書が、にわか話題になることもめずらしくはない。

しかし、いつの時代も「ブーム」というものはいつかは去り、そして忘れ去られる。特に日本人はこの「ブーム」というものに振りまわされやすい。

所詮「ブーム」でしかないため、我々が大切に伝えていかなくてはならない「古典の書物」が読まれているかと言えば、そうでもないらしい。

むしろ人々に親しまれ、読まれる「古典の書物」はほとんどないといえよう。そんな中で、親鸞聖人の弟子の唯円が鎌倉時代に記したとされる『歎異抄』だけは、これまでかわららず多くの人々に親しまれてきた。

我々真宗門徒にとつてこの『歎異抄』は、「古典の書物」に

とどまらず、現実の親鸞聖人の姿をうかがい知ることのできる大切な「御聖教」という意味合いを強く持っている。

第九組ではその大切な「御聖教」である『歎異抄』を題材に、数年間に亘り講師を招いて聴聞した。

特に平成十三年、十四年、十五年と三年連続で現在大谷大学教授の小野蓮明師をお招きできたことは、第九組にとつてたいへん意義深い。

これは恐らく第九組の夏期講習会初の試みであろう。

では今なぜ『歎異抄』なのか。その答えは小野蓮明師が語られている次の言葉の中にある。

いよいよ読んでみたら、なるほど七百年前に「ななくふでをそめて」聖人の教えを伝えてくださったのは誰のためかと言つたら、今、真宗門徒として聖人の仏法に深い縁をもつて生きようとするこの私の惑いを、今晴らすつとする唯円の願いを、

この文章から読み取つてほしいのです。

『歎異抄のいのち』より)

小野師は、『歎異抄』の問答形式をもつて紹介されている箇所は、第二条、第九条、第十三条であり、こういうところに親鸞聖人と当時の門弟達との対話問答が出てくるという。

内容の豊富さ故、今回はこの三年分の貴重な講演内容を一冊にまとめることとなった。

小野師はこの中で三つの問答をどのように捉えているのかわかることを最後に紹介したい。

この問答を通して何を言おうとしているかと言えば、一番大切な目覚め、信仰的自覚です。これを、当時門弟たちと対話しながら見事に明らかにしている箇所が先ほどの三カ所です。

『歎異抄のいのち』より)

弟子の唯円がどうしても『歎異抄』を記さなければならなかった理由を考える時は、まさに今である。(文責 大溪昌寛)

第九組 行事紹介

「平成十八年度夏期講習会」

日時 平成十八年八月二十五日(金)

・二十六日(土)

両日とも

午前九時から午後四時

場所 福泉寺(幡豆町東幡豆)

講師 寺川 俊昭 師

(元大谷大学学長)

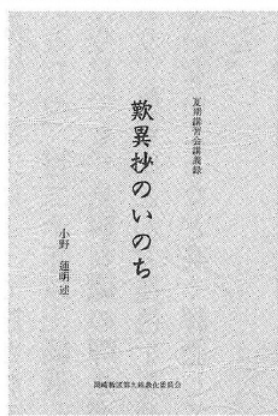
聴講 無料

照会 福泉寺まで

六二―二八五一

「講義録について」

第九組では夏期講習会の講義録を毎年度ごとに作成しており、『歎異抄のいのち』の他にも若干お分けできる物があります。まずはお問い合わせ下さい。



第十組のページ

本山瓦ものがたり
— 明治時代の偉業 —

(2) 志貴野製瓦場の開場(その二)

二〇一一年宗祖親鸞聖人の七五〇回御遠忌法要に向けて、ご本山では二〇〇五年七月から「御遠忌お待ち受け総上山」と称して様々な取り組みをはじめている。中でも、「お待ち受け一日参拝」は、御影堂御修復現場の視察、屋根等の修復状況を門徒の方々に広く認知していただくことにより、明治期の両堂再建時の先達の偉業から法義相続と本廟護持の精神を学ぶものである。

■製瓦場の規模

明治十八年十二月十五日、本山再建作事部の報告書に、「工作支場ニハ、建家二拾四棟アリ。其内瓦葺十九ヶ所、此坪数一〇六九坪六分七厘、藁葺五ヶ所、此坪数百九十六坪。又、場内ノ総坪数ハ、四千六百二拾坪半ナ

リ。」とある。これは、名古屋ドームのフィールド面積よりも広い敷地面積である。そして製瓦業に費やされた期間は、明治十四年七月二十七日以来、同十二年二月下旬までの凡そ五年と七ヶ月間である。

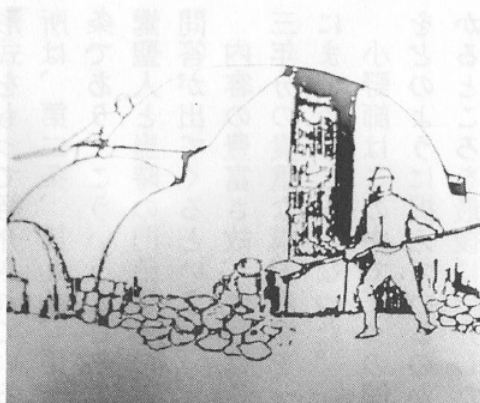
■明治期の達磨窯

赤羽御坊第十号掲載の『参陽商工便覧』に見られる製瓦場の様子からは、大きな達磨窯が四基描かれており、焼瓦のため、達磨窯を窯築していたことがわかる。明治期の達磨窯（達磨さんが座禅を組んでいる姿に因んでつけられた名）の全長は、凡そ五メートルほどのものが一般的であった。

その構造は、中央に瓦を焼く焼成室があり、その両隣に燃料（薪等）を焚く燃焼室を備えている。一般の家庭に使用されている瓦を一度に焼瓦する枚数は一窯で約七〇〇〜一〇〇〇枚程度であり、焼成温度は七〇〇〜一〇〇〇度。しかし、両堂の瓦の場合には縦五四センチ、横四四センチ、重さ四貫八〇〇目

(約十三kg)の大きさと重量があり、一般の瓦の規格の約三〜四倍となる。すると、一枚一枚の瓦に満遍なく焼成を行うためには、あまり大きな窯は適さなかったのであろう。

窯一基につき、一度に明治瓦を二〇〇〜三〇〇枚程度焼成、内三割を破損と見込むと、約一五〇枚程が焼かれていたと考えられ、製瓦場にいくつもの窯をしつらえて稼働させていたことが容易に推測できる。



高浜市瓦美術館に復現された達磨窯の説明版より

■瓦職人の情熱

高浜市瓦美術館の学芸員の話によると、一般的に瓦は五、六十年経つと色が褪色するが、本

願寺の瓦については丁寧な仕事で、明治期の両堂再建が大きな信仰運動の一つとして完遂されたものであることを受けて、私たちに今、何が問われているのか考える時である。

(文責 三村 謙作)

第十組 行事紹介

●『仏典童話』の朗読

日時 四月十五日(土) 午後二時

講師 渡辺 愛子氏

場所 願正寺(西尾市熊味町)

●第五回心の元氣塾

日時 五月十三日、二十日、二十七日、六月三日、十日

講師 小谷 香示師(明栄寺住職)

●志貴野製瓦場記念碑参拝

日時 六月五日(月) 午前9時半

場所 製瓦場記念碑前

志貴野製瓦場記念碑保存会 主催

第十一組のページ

蓮如みち

今年で第十八回目を迎える〈蓮如みち〉では、毎年カルチャーウォークを行っている。今から五〇〇有余年前、蓮如は西端の地（現在の碧南市西端町）へとやってきた。人々は蓮如に出会い、生きることの尊さを知った。

現在では、多くの力によって生かされているたった一つしかない命であるにもかかわらず、そうした願いや想いから離れてしまった。一時期に比べて減ったといわれているインターネットでの自殺志願者を募集するホームページ、それが手軽に探せなくなると、今度は携帯電話のメル友同士による自殺。多くの自殺志願者たちが、一緒に死んでくれる人を求めて自らの命を縮めている。あまりにも生きること、死ぬことに対して無頓着になり過ぎてしまった。それも本人にしかわからない悩みや苦しみがあつての行動なのだろうか？

生きることが喜ばずに死んでいくのは他の誰でもない、私たちも同じではないだろうか。生きることだけでなく、多くのことに喜べない。自分の思い通りにならない。自分が気に入らない。自分の欲しいものが得られない。そうした自分ばかりに目がいつて、いつしか自分ひとりで生きていると言わんばかりに我が儘わがままにいきている。〈蓮如みち〉は「自分で生きている」から「生かされている自分」であることを見つめなおす良い縁だと思ふ。

(文責 新田 智則)

十一組 行事紹介

●蓮如みちカルチャーウォーク

詳細は事務局へお問い合わせください。

事務局 正念寺 0563 (57) 2476



第十二組のページ

門徒会座談レポート③

お寺に何を期待するか、
そして宗教に何を求めるか。

A 子どもの頃は困ったことがあれば、どんなことでもお寺に相談に行きましたよね。

B お嫁さんをもたらったときなんか、まずお寺に挨拶に行つたなあ。夫婦げんかをして、どうにもならんぞという時にも、お寺さんに仲裁に入ってもらつたりしてね。

C 今は用事がないと行かんけど、昔は用事があるが無かるうがお寺へ行ったもんだ。何か役でもあたってないと、いかにやいかんと思わない。役が終わってしまふと、なかなかいけなくなってしまうからね。

D 子どもの頃は毎日のようにお寺や神社の林の中を走り回っていたよね。

E そうそう、大きな屋根の上に登つたりしてね。今思うとよゝあんな高いところ登つたなと思うね。

F 本堂が戸締めになつていたりして、とつても行きにくいお寺もあるよね。

C もちろん本堂が開いていて、いつでもお参り下さいというところが大事でしょ。

A 私は色んなお寺にお参りしますが、見た目が汚い格好で知らないお寺に行くと、不審者が来たんじゃないかと、疑われるのが分かりますよ。

C 見た目だけで判断される雰囲気がありますね。

G 知らないお寺に突然お参りに行った事がありますが、そしてその坊守さんが出てみえてね。良かったら本堂に上がつていって下さいと言われて、お寺の話聞かせてもらったことがありました。すごく気持ち良かったですね。

B お寺というのは、なるべく留守にならないように、誰かが



必ず居るといふ風でしたね。現在では、そうできないところもあると思いますよ。残念ですけど。

C 昔といえ、念仏講に、その地区の年長者がお勤めの導師をしていたでしょ。自信がない人は、自分から進んでお寺に習いに行つたもんだ。この頃では、念仏講自体をやらないう地

域もあるみたいだね。

A あらゆることに、やらなくて済むなら、やらん方がいいという風潮が強いね。

C 葬式と還骨のわずかな時間でも、自分の用事を果たしに帰ってしまうしね。

E 式場の人がほとんどやって、みんな送ってあげるといふ実感はまるでないね。

D あと、家の人自体も隣に悪いからと遠慮してしまうからね。

レポーターの感想
話し合いが弾んで、テーマとは少し違う話になつてしまつた。でも、お寺や現代の宗教行事などについて、真剣に考えていくくれるということが、伝わってくるような座談会でした。それと、手間のかかることでも、大事なことは大切にしていくことが求められていると思ひました。これからも、続けて行きたいと思うし、多くの人が参加できるようにしていきたいです。

(文責 伴 仁志)

第十四組のページ・碧南

シリーズ 親友^{しんぬ} ③
心の元氣塾で出遇った仲間たち



喜助田信子さん ホームヘルパー。二〇〇四年に心の元氣塾「推進員養成講座」に参加。法名は、釋尼樂信(しやくにぎようしん)。

―お寺に足を運ぶようになられたきっかけというのは。

歌(仏教讃歌)のお稽古をしに、平成八年頃からかしら。それからずうっと、西光寺さんに足を運んでいます。

―どういって縁で、歌は始められたんですか。

私、もともと身体弱かったのだからあんまり歩けなかったの。それで、朝、グループで歩いている人たちが「弱い弱いって言ってなくて、歩いたら」と、誘ってくださって。

そのグループの一人が、山登りをされた時に、山の頂上で恩徳讃を歌ってくださったんだって。

―山の頂上で。それはすごいですね。

それで、私を歌に誘ってくれた人が、「それ、何のうた」って聞いたたら、「恩徳讃と言って、親鸞さまの歌でいつもお寺

で歌うんだよ」って。で、「あなたたちも、歌のお稽古に來ない？」って言われて。それで西光寺さんにご縁をいただいたの。で、その時に、その方が言われたことが忘れられないの。

―どんなことですか。

「お寺の山門くぐるってことは、とつてもいいことよ」って。

ましてや、その山門をくぐって、境内の中へ入らせてもらって、本堂に手を合わせて、それで仏さまのお顔をじっくり拝見させてもらうという事は、なおいいことだつて。

で、まず「門をくぐる」ということ、それから始めなさいっていうことを教えていただいたの。それまでは、お寺は何か用事がない限り、入ってはいけなところだと思つたのね。

―そこいって感じ、ありますよね。

だけど、それはそうじゃなくて、門をくぐって中に入らせ

てもらつて、そして、手を合わせてもらう。それがすごい大事なことだと教えてもらったの。すごいうれしかったの。「いつでも、お寺の門はくぐつていいんだよ」って言葉は。

―まわりの人にも聞かせてあげたい言葉ですね。

(二〇〇六・一・二十五) 聞き取り 永坂・編集 安藤

○心の元氣塾オプションツアー 開催される
真宗寺院を訪ねて 一遊び心で真宗とふれあおう―

去る1月29日(日)に、心の元氣塾、初の試みとして、三河の真宗寺院(応仁寺・上宮寺・妙源寺・本宗寺・勝鬘寺・本証寺)を参加者14名と共にバスで巡りました。少し寒かったのですが、本講座とはまた違った雰囲気楽しく有意義なツアーでした。お寺は敷居が高い所ではなく気軽にける所だよということをもっと若い人たちに知ってもらえると嬉しいです。(木村)

別院の動き

赤羽別院再生委員会レポート

今回で五回目を数える赤羽別院再生委員会は、人々からその存在意義を忘れ去られようとしている、文字どおり「赤羽別院の再生」を目指し発足したものである。

そこでその場でどのような話し合いが行われているか興味があり、今回レポートすることにしました。



はじめに副輪番あいさつの後、藤谷信雄再生委員長の進行で再生委員会が始まった。

委員からの提案内容が一つにまとめられた資料を基に、活発な意見交換がなされた。

ここで議論を尽くした後、その内容がまとめられ、答申が出されるという。

今回初めて「再生委員会」を取材した感想は、答申を出すまでにはもつと時間をかけて、出来るだけ多くの意見を集約し、その意見の中からポイントを絞って一つ一つ検討していく必要があるように感じた。

「赤羽別院の再生」は、即ち「真宗再興」を意味する。

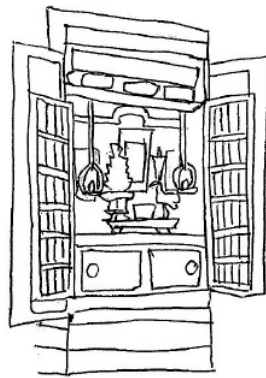
次回も再生委員会での積極的な意見交換が行われることを期待しつつ、レポートを終わりたい。
(文責 大溪 昌寛)

Q&Aのコーナー

Q 私たちが、おまいりするお内仏は、どんなところでしょうか？

A お内仏は、真宗のご本尊、阿弥陀如来様を安置するところ。すなわち、私たちが「み

おしえ」に会う場所です。では、阿弥陀如来様は、どんな仏様でしょうか？阿弥陀様は、私たち一人ひとりに「あなたの人生はそれでいいですか？」と問いかけて下さっている仏様です。阿弥陀様は、「みおしえ」そのものです。わかりにくいですかね。



お内仏は、自分の得する事を願ったり、亡くなられた方を祀りあげるところではありません。お内仏は、私たちが「阿弥陀様のおしえ」に出会う場所です。「遇」という文字は、すでに知っているものにあう。すでに遇っているものに目覚める。ということ。阿弥陀様のおしえは、忘れていた自分自身に

遇う。「私の人生は、これでいいのか？」と自分自身を問われてくるところです。
(文責 小栗 貫次)

「赤羽御坊」協賛者芳名

(前号披露分以降の協賛者)

- 西尾市唯法寺 ▼ 吉良町正向寺 (2回)
- 西尾市上矢田町浄徳寺 ▼ 西尾市聖運寺 ▼ 西尾市巖西寺 ▼ 一色町明栄寺

編集後記

新しいスタッフが加わり、紙面も八ページになり、別院で毎月開催される真宗講座の法話も掲載することができました。各組のレポートとは別の味わいが持てるかもしれない▼四月になると、別院の桜が一斉に花開きます。旧本堂跡の高台は、絶好のお花見空間です。是非お出かけを▼五月になると、桜に替わって、藤が見事な花を咲かせます。春は別院から目が離せませんね▼「赤羽御坊」発行の協賛者を募集しています。あわせてご意見もお聞かせ下さい。